

## 中学生による最終処分地問題の理解促進—その成果と課題—

Promotion of the Understanding on the Final Disposal Site Problem by Junior High School Students

- Achievements and Issues -

\*澤田 哲生<sup>1</sup>

<sup>1</sup>東京工業大学・先端原子力研究所

核のごみをめぐる『中学生サミット 2018』に全国の7地域(原子力立地県4、首都圏、中京、京阪神)から20名の中学生と9名の高校生が首都圏に集い、最終処分地問題についてダイアログ(対話)した。その結果、中学生がこの問題を理解し自己の意見を十分に反映し意思決定の入り口に立てることが明らかになった。

**キーワード**：高レベル放射性廃棄物最終処分問題、中学生、理解促進、意志決定、アドボカシー

### 1. 緒言

2018年12月に、全国7地域から29名の中高生が二泊三日の行程で集い、まず青森県六ヶ所村の施設を見学し、その後東京にてダイアログ(対話)を行った。そのテーマは“核のごみをどうするのか”である。六ヶ所村では、施設見学の後、地元の有志3名から六ヶ所村の歴史や変遷などについて説明を受け、意見交換する機会も持った。

### 2. 方法

実体(施設)の見学やレクチャーにより得た知識に基づいてダイアログを展開する。その要点は、1) 科学的かつ論理的に思考する、2) 内省的思考から社会的責任を自覚する、3) 批判的思考の発揮である。加えて、①他者の発言を尊重しじっくりと耳を傾けること、②他者の考えを積極的に取り入れて自己の視点をアップデートすることを促した。また、ダイアログのファシリテーションは4名の高校生が自発的に行った。

### 3. 成果と課題

見学/レクチャー/ダイアログの全日程を終えた後、参加中高生にアンケートを実施した。アンケートは無記名かつ属性(出身地、性別、年齢など)を一切問わない形で行った。高レベル放射性処分の最終処分に関する自己の理解が深まったかどうかに対しては、程度の差はあれほとんどの参加者から理解が深まったとする回答があった。その一方、ますます疑問が深まったという参加者も数名いた。今後の課題は、1) 次年度以降への継続参加希望に応えること、2) 参加枠の拡大、3) 理解促進に関する定性的指標の導入、4) 発信の方法と多様性、5) この問題への未成年者によるアドボカシー(公共政策の形成や変容の促進)を支持することである。



図1 ダイアログの様子

### 4. 結言

参加者の一人(中学生)が、全国紙朝刊の『声』の欄に投稿し採用された。その『声』は「地層処分をする場所は決まっていない。だからこそよく知ることが最低限の責任だと思う」と結言された。

\*Tetsuo Sawada<sup>1</sup>, <sup>1</sup>Tokyo Tech.